

旅する工具屋

第六話：アマチュアが挑むプロフェッショナルなサラダ屋

駐在生活が2年を過ぎた頃、ヨーロッパでの仕事や生活にもすっかり慣れ、英語での会話や交渉、長電話にもずいぶんストレス無く対応ができるようになっていました。仕事の担当国にはイギリスも含まれていたため、ネイティブとの会話経験にすっかり自信を付けた私は、ふと「そろそろアメリカデビューできるのでは？」と思いました。

特別アメリカに大きな夢を抱いていた訳ではありませんが、何かと「～大国」や「全米～」と取り扱われる特別さに、どこか敷居の高さを感じていたのかもしれませんが、そしてある一定のレベルアップを感じた私は、アメリカ最大の都市・ニューヨークへ向かいました。

ジョン F ケネディ 空港にバックパック1つで降り立った私はビジネスライクな入国審査官と、なかなかワイルドな税関との濃密な時間を経たあと無事アメリカへ入国。電車(LIRR)に乗ってペン・ステーションの地上に出ると、そこはもうマンハッタンです。

7th アベニューをしばらく歩くと、次第に人が増え、車が増え、なんというか通りが“熱”を帯び始めます。その熱量が最も大きくなる場所はすぐに分かりました、まさにニューヨークの顔、タイムズ・スクエアがその先にあるのです。ぐんと自然と足は速まり、気持ちが弾みます。独特の高揚感と数えきれない華やかな光の壁、全てが輝きに溢れて見えました。



一通り雰囲気堪能したあと、そこから少し移動して54番通りのホテルに荷物を置き、中学の英語で教えてもらったエンパイア・ステートビルへ。そこから眺め下すマンハッタンの街はまるで行き場の無い力や上昇志向が、高層ビルという形で具現化されている様に見えました。

翌日以降に訪れたグラウンド・ゼロ、国連、セントラル・パーク、ブルックリン、リパテン島、チャイナタウン、ハーレム、どこに行っても共通して感じられたのは人々のプロ意識でした。誰もが何かしらのプロであり、自分自身に誇りを持っていて、活気に満ちた街を構成する主役を演じているようです。

よく東京は日本のマンハッタンの様に扱われますが、実際に街を訪れて感じた印象は全く異なるものでした。街の理想像がはっきりとあり、全員が同じベクトル上を全力で進む姿はいかにもアメリカンで、歩くほどにその違いが面白く感じられました。



屋台のホットドック, 夜の出店で行列に並んで買ったチキン・オーバー・ライス, ステーキ, 食べ物は世界中から集まる高級レストランよりも, 現地の B 級グルメを中心に楽しみました。ところがやはり日本人の私には少々重たい物が続いたらしく, あっさりした食事で済ませたい日が訪れます。もちろん日本食のレストランもありますが, アメリカデビューを目的とした旅で日本食は”敗北”を意味するような気がして, 選択肢から外しました。

セントラル・パークからカーネギーホールの方へ歩いていたらそんな時に, ふと目に留まったサラダバー。サラダボウルでスマートに食事を済ませるなんてオシャレじゃないか, と意気揚々に入店しました。思いのほか長く進みが遅い列に並ぶ事しばらく, レジが近づくとその理由が明らかになりました。サラダの主菜から副菜, トッピング, ドレッシングまでフル・オーダーで製作する, まさにプロ・ベジタリアン向けのお店だったのです。

諦めて外に出れば日本食もスーパーもありますが, 今までの努力や経験がきっと役に立つはずだと自分を鼓舞して列に並び続けました。そして自分の番が来た瞬間, 6×7 段くらいある主菜のケースに一切野菜の名称が書かれていない事に絶望しました。

見渡す限りの野菜(というか葉っぱ), よく見れば微妙な違いはありますが雑食な私にはその違いはおろか, 英語での名称など分かるはずがありません。名前でオーダーする事を諦めて, 「上から 2 番目, 左から 3 番目をメインで」と座標指定に切り替えました。

悪くないアイディアに思われたこの注文方法ですが, プロ・ベジタリアンの方々には全くと言って良いほど受け入れられませんでした。辛うじて注文したものは手に入ったものの, 反笑いの店員さんや, 列の前後の人々の反応は明らかにアマチュアな私に批判的だったのです。自分の口に入れる物の名前も知らないのか, と咎められている様な気がして, さっさと食べ終えた後はコーヒーも飲まずに退店しました。

ホテルへすぐ帰る気になれなかった私は散歩がてら夜のタイムズ・スクエアを見に行く事に。夜は LED ビジョンが一層鮮やかに光り, 街行く人も長い夜を楽しもうとしています。スクエアの活気は昼間よりも凄まじく私を叩きましたが, それとは別の理由でマンハッタンという街の特異さを感じている私がそこにはいました。

帰りに買ったサミュエル・アダムスは苦く, 今でも飲む度にサラダバーの事を思い出します。アメリカデビューは文字通り苦い締めくくりとなりましたが, お陰で「アメリカでも通用した」などと天狗にならず, 逆に気持ちを引き締めてドイツの生活に帰る事ができました。

現在でも英語での業務でたまに困難な場面に直面しますが, “あのサラダバーに比べれば”と考えると, ずっと楽になります。私の心を鍛え, 支え続けてくれるたった 15 ドルの一皿。なんと素晴らしい買い物をしたのでしょうか。

文: ペンネーム 17chandler